

## B-2. 「わき芽を残す？」（苗植え、肥料やり、わき芽とり）

立花愛の園幼稚園（兵庫県尼崎市）

[5歳児]

### ① 苗植え

4月、子どもたちが遊べるように半分をクローバーにした畑で存分に遊んだ後、何もない残り半分の畑に気付いた子どもの言葉をきっかけに、自分たちの4歳時の栽培の経験を生かして、野菜作りの話し合いをし「畑プロジェクト」が始まりました。

自分たちで選定した野菜の苗が届いたのを見て、子どもたちは大喜び。「これなに、これなに」と、興味津々。そこで、葉っぱの匂いから何の苗なのかを探ることにしました。

「これトマトの匂いがする」「うわー、これピーマンの匂いや、うえー、俺ピーマン嫌いやのに、匂いをかいてしまったわ」と口々に、自分の感じた匂いによる発見を言い合っていました。

しかし、匂いで分からぬるものもありました。すると、A君「これなすびちゃうか」保育者「なんで、なすびだと思うの？」A君「だってな、ここの辺がなすびと同じ色してるもん」B君「そうやな、なすびと同じ紫に見える」と、保育者が投げかけた“匂いによる野菜の種類当て”とは違う方法で、自分なりに答えを導き出したのです。そして、その意見を聞いた周りの子どもは、どれどれという感じでその葉っぱや茎を覗き込み「本当や、なすびの皮と同じ色に見える」「これ絶対になすびや」と、仲間の意見を取り入れ、自分で確かめることで、自分なりにそれが答えたと納得し始めたのです。

### 考 察 科学する心の要素—推測する機会

何の苗なのかを、自分の感覚や経験を総動員して推測し、いろいろな手段で確かめることで、子どもたちは答えを導き出してきました。幼児なりの答えを導き出す過程というものが、自分なりの根拠から理論的に推測し、結論づける科学的手法となっていることがうかがえました。

子どもたち自身が、事前の話し合いで植える野菜を決めており、もちろん「何種類か」「どんな野菜か」ということは知っています。葉っぱの匂いをかいで「何の苗か」を導き出そうとした時に、子どもたちの中では、目の前の苗の形状の認識や匂いと、自分たちが選んだ野菜とを組み合わせながら、合致するものを導き出すという思考活動を行っていました。

ただ活動を進める一過程として、答えを保育者がすぐに言ってしまえば、このような体験は生まれなかったでしょう。このように、子どもたちが推測し、「○○だから△だ！」というふうに試行錯誤しながら考える体験は、保育のなかにちりばめられているように感じています。が、それをタイミング良く捉え、子どもたちに返していくかどうか、子どもの「科学的な見方」が積極的に展開できるかどうかは、保育者の意識次第です。

### ② 肥料やり

毎日、畑を見に行き、当番の日を楽しみに、実際に水やり当番が回ってくると、子どもたちは水やりを一生懸命に行い、湿っていない畠（うね）を見つけると、「ジョウロもってる人、ここに（水）あげて」と、教えあう姿も見られました。そこには、役割を担当する誇りと責任感を見てとることができました。

肥料が必要な時期になり、まず、肥料を与えるかどうかを保育者が伝え、子どもたちで話し合い、実際に肥料やりを行うことになりました。使う有機肥料は保育者が用意しました。

子どもたちは、袋からプリンカップで肥料をすくうと「うわー、臭い！」と、鼻を押さえながら運んで、苗の間に肥料をまきました。

Aちゃん：「くっさー、先生、この肥料って何がはいっているの」

保育者：「よく見てみたらわかるよ。なーんだ」

Bくん：「えー。あっ分かった。貝みたいなのが入っている」

子どもたち：「ほんとや、ほんとや」

保育者：「他に入ってるけど、匂いで分かるかなー」

子どもたち：「うわー、くっさー、臭すぎる」

保育者：「臭いやろ。臭いものなんだ」

Cくん：「くさいもの。それって“おなら”とか“うんこ”と違うわな」

保育者：「当たり。実は鶏糞って言って、“鳥のうんこ”が入っています」

子どもたち：「エー、鳥のうんこが入ったるんやで。臭いはずや」

保育者：「昔は人間のうんこやおしっこも畑に肥料にして、まいとったんやで」

子どもたち：「エー、いややー！！」

保育者：「でも肥料のおかげでおいしい野菜がたくさんとれるんやったらしいやろ」



## 考 察

### 科学する心の要素—効力感から次の意欲へ

子どもたちにとって有機肥料は正直臭くてかなわないものであったようです。しかし、臭いからといって、口では「嫌や。」と言ながらも、実際に嫌がってやめるということはいっさいありませんでした。逆に、「僕まだ肥料あげてない。」と、肥料を与えることに意欲的に取り組みました。その姿の根底には、水やりをし、観察日記をつけるなど日々の世話をする中で、自分たちの働きかけの結果として食物の生長が見え（効力感）、それと共に野菜への愛着が生まれ、その喜びとともに、「もっとかかわりたい」という意欲が出てきているからだと感じました。

### 科学する心の要素—疑問が次の興味へ

実際に有機肥料をやることで、この肥料の匂いが臭いのはなぜなのか？何で出来ているのか？ということに疑問を持ち、興味を持ちました。そして、肥料について保育者と話す中で、昔の農業について知るきっかけにもなりました。子どもたちは疑問を持ち、その疑問を周りに表出することによって、無意識のうちに活動の中で知識を広げ、深めていることがうかがえました。

### ③わき芽とり

子どもたちに、わき芽を取らなければ、わき芽の生長に栄養を使い、実がおいしくなるための栄養が行かなくなることを知らせました。そして、一緒にトマトのわき芽取りをしました。子どもたちは、自分が受け持ったトマトのわき芽を全部取ると、「先生、これでおいしいトマトが出来るな。」と、嬉しさと誇らしさが入り混じった表情で口々に伝えに来ていました。他の子どもも「全部取れたよ。」と、次々に教えてくれました。

そんな時、Yちゃんが「先生、私がわいそうなことをしてしまった」と、少しショッキング言いに来ました。どうしたのか尋ねると、「こっち来て」というので、Yちゃんのあとをついていきました。すると、そこには茎の折れたトマトがありました。その折れたところを指差して、「このわき芽を取ろうとしたらな、これも一緒に折れちゃった。ねー、先生、可愛うなんやけど、どうすればいい」と言うのです。すると、横にいたH君が「本当や、かわいそうやな」と、折れたところを持ちながら支えて、茎を元の形に戻そうとしました。しかし、よく見るとそのトマトの折れた茎の下の方にわき芽がありました。そこでそのわき芽を指さして、保育者は、「これ、なんだ？」と、言いました。

Yちゃん：「えっ、わき芽？」

保育者：「そうや」

Hくん：「そしたらこのわき芽を残しといて、大きくなつてもらえばいいねん」

Yちゃん：「そしたら、また、大きくなつてトマトがきちんとできるの？」

保育者：「どうかな、世話してあげたら出来るかもしれないよ」

Yちゃん：「あー、よかった」と、Yちゃんの表情に笑顔が戻りました。

## 考 察 科学する心の要素—いたわる気持ちの広がり

間違って茎を折ってしまったトマトに対して、「かわいそう」と、人に対するかのような感情でいたわるこの言葉に、子どもたちがどれだけ大事に思って育てているのかを感じました。人任せにして育てているのではなく、手をかけ、気にかけながら自ら育てているからこそ植物に対して感情移入したのです。

また、植物に命を感じているからこそその言葉もあり、この植物へのいたわりが、人に対するいたわりにも大きく関与しているのではないでしょうか。折れた茎を見ても誰も責めず、一緒に何とかしようとした姿がみられました。野菜をいたわり、大切に育てている体験は、「人を大切にする」という大切さも学んでいました。それは育てている子どもたち皆に感じられたのです。

また、自分たちが育てた（かかわった）結果として、目の前の野菜（結果）が生長していることは、子どもたちにとって、責任をまとうしているという自信にもつながっていて、自らやり遂げる力も身に付けていっているように感じられました。

## ポイント

目前の苗と知っている野菜を結びつける場面や、野菜を育てるのに必要な「肥料」への疑問や好奇心をもった場面で、「どうしてそう思うのか？」と保育者がかかわることで、子どもたちは推測して自分の考えを言うことができました。また、友達の言葉を受けて、周囲の子も自分なりの考えを伝え合い、推測を確かなものにしています。こうして、野菜栽培への関心が高くなることで、「わき芽とり」という活動の意味が分かり、直接栽培物に触れて生長を感じながら世話をする喜びを味わう活動につながっています。茎とわき芽を間違えて取ってしまった困難の場面でいたわりの気持ちをもてたことや、保育者や友達の言葉から、経験により得た知識を基に不安を解消できると考えられたことも、「科学する心」の育ちに結びついています。